

そしてこれが「敍意一百韻」の全編に亘る作品の可能な限り具体的な解釈を施した書である。この書を通して見えてくる詳細な考察は、別の機会に譲りたいと思うが、この作品では、一言で言うならば、京都から突如として罪人とされ、急き立てられるように太宰の地に追放された道真公の絶望感と孤独感が涙なしでは読めないような壮絶な叫び声を伴い詠われている。そうした過酷な状況で、その自分の気持ちを理解し、慰めてくれるものは現実の太宰の地には存在しなかった。そうした悲しみのどん底にある人間が求めるものは、やはり自分と似た境遇で生きた人間の生き様しかなかった。道真公にとってはそれが現実の生身の人間でなく、中国の古典の世界に描かれている、権力に屈せず、富にもおぼれず、名誉にも拘泥せず潔く、人としての道を全うした偉人たちの行跡だった。そうした過去の人間にしか、自分の今を慰めてくれる者を見出しえないところに、道真公の心の闇の深さと絶望感の深刻さを感じずにはいられない。まさしく道真公の『魂の書』ともいえるものであることを実感させる一篇である。

(焼山 廣志)